

Living the Lotus 7

Buddhism in Everyday Life
立正佼成会台北教會40周年慶

2025
VOL. 238



Living the Lotus Vol. 238 (July 2025)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼協祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教)というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

有り難い命をいただいて

庭野日鑑
立正佼成会会長



過去から学ぶ

今年わが国は、先の大戦の終結から八十年の節目の年に当たります。戦争そのものの是非はいまさら言を俟たないわけですが、ただ東京大空襲や沖縄での激戦、さらには原爆の投下など筆舌に尽くし難い悲惨な戦争の記憶が、時間の経過とともに少しずつ薄れゆくようで複雑な思いがします。とはいえ私も、爆撃機の襲来を知らせる警報により防空壕入りした体験がある程度ですから、空襲や戦闘のただなかを生き抜かれた方々の思いや記憶は想像すらかなわないのですが……。

「撃たれ死に焼け死に飢ゑて死にゆきしひと重なりて戦ひやみぬ」「死にし子のポケットにある黒砂糖けふの三時のおやつなりしを」——沖縄の歌人、桃原邑子さんの歌です。

日本軍と、米英を主体とする連合軍との戦いで戦場となり、そこで二十万余の尊い命が失われた沖縄の悲しみ、そして中学二年生のご子息を戦闘の巻き添えで亡くされた桃原さんの、母としての哀しみが胸に迫ります。

しかし、明るい未来を築くためには、このようなつらくかなしいできごと、悲惨でむごたらしい過去も、しっかりと直視することが重要なのではないかと思うのです。なぜなら、記憶を継承しながら、そこにある反省点や学ぶべきところを智慧に変え、後世をよりよい世界にすることができるのが、いま命をいただく私たちだからです。

また、作家の曾野綾子さんは「悪、醜、残酷さ、無関心さなどを見せられることによって、私たちは人間的な心を育てる」（産経新聞／平成二十八年一月十三日付）と述べています。反面教師という表現があるように、戦争に象徴される、人間によって引き起こされる禍をふり返るなかで、自己にもある悪心と善心を凝視するとき、私たちは同じ過ちを繰り返すまいと務め、同時に慈しみの心をも育てるのです。

この時季に催される盂蘭盆会や戦没者の慰霊にまつわる諸行事は、あまたの御霊を安んじつつ私たちが自らの心を見つめ、懺悔とともに未来を考える時と場でもあるのです。

大調和の心を

釈尊は「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」と説かれました。自分がおびえ、おそれることは、他の人も同じである、つまり安心して生きられる平和な日々をすべての人が願っているということです。

いっぽう日本で最初の成文法「十七条憲法」で、聖徳太子が第一条に掲げたのは「和を以て貴しと為す」という有名な一節です。この「和を貴ぶ心」「大和の精神」は、日本人が昔から大切にしてきた心ですが、釈尊のお言葉に照らせば、これは地球に住む人間すべてに共通する願い、本願といえないでしょうか。そして、世界平和というその本願を実現に導くのは、「大調和の精神」以外にはないのです。

先にご紹介した桃原さんの生地沖縄では、沖縄以外の日本のことを「ヤマト」と呼ぶそうです。日本の歴史的呼称の一つが「大和」であることと無縁ではないでしょうし、大いなる平和をも意味するこの国人の私たちが率先してその精神を発揮しないかぎり、「平和な世界も未来も望めない」という気概をもつことが大切であると思います。もちろん、家で夫婦や親子きょうだいがかみ合いをしていては、人さまに「大和」を説くことはできませんから、「齊家」（家庭を斉えること）ほど大切な平和運動はないと心得て、日々をすごしたいものです。

そのうえで、かなしい歴史を二度と刻むことがないよう、仏の教えを伝え広めて大調和の世界をめざす。人間としての有り難い命をいただき、未来のために私たちにできることは、その一点に尽きるのです。



（『佼成』2025年7月号）

ひとつひとつの出会いに導かれて 気づいた仏さまとのお縁

台北教会 黒島 真洋

この体験説法は 2025 年 5 月 3 日、台北教会で行なわれた「台北教会発足 40 周年記念式典」で発表されたものです。

本日は、記念すべき台北教会発足 40 周年の良き日に体験説法のお役を賜り、誠にありがとうございます。

私は 2015 年の「台北教会発足 30 周年記念式典」の中で、「台北教會歴史回顧」と称して教会史を紹介するお役をさせていただきました。この度の 40 周年記念式典に際しては、仏さまから不思議なお縁を頂き、体験説法のお役を頂戴したことに心より感謝申し上げます。

私は沖縄県の石垣島で 4 人兄弟姉妹の長男として生まれ、18 歳で地元の高校を卒業後、台湾の大学に留学しました。日本人留学生の私には中国語による授業の履修は苦勞の連続でしたが、同級生たちに励まされ、試行錯誤をしながら台湾での大学生活を送っていました。卒業後は沖縄に戻りましたが、当時の沖縄には中国語を使う仕事や職場があまりなく、しばらく考えた末、東京で就職することに決めました。東京では、初めの数か月間はアルバイトをして生活の基盤を整え、その後スーパーを経営する会社に就職しました。その後、海外に工作機械や電子部品などを販売する会社に転職し、台湾や中国の顧客向けの営業を担当するようになり、やがて台湾にある支社で仕事をする機会を得ました。

この時の台湾での会社勤務が機縁となって、私は立正佼成会のご法の縁に触れることができました。当時、会社の大事なお客様に、富山教会の大越壮年部長さんがおられ、大越部長さんが台湾に出張に来られた際、台湾での仕事が上手くいくように、地元の仏教寺院の参拝を希望されていることを聞いた私は、部長さんを台北の有名なお寺にお連れして、参拝のご案内をさせていただきました。そのことがきっかけとなり、部長さんから「今度は私の知っている仏さまがいらっしゃる

場所にご案内しますね」と言って頂き、2005 年に、当時後藤益己教会長さんが在任されていた台湾教会にご縁を頂くことができたのです。

私が子どもの頃、父と母はともに異なる宗教を信仰していて、考え方の違いから、よく家の中で言い争いをしていました。そんな両親の姿を見て育った私は、二人とも幸せになるために信仰をしているのに、なぜ意見の食い違いがあるのだろう、なぜ家庭不和がなくなるのだろうか、いつも疑問に思っていました。

そのためか、大越壮年部長さんから、開祖さまのお声がけで、京都で世界の宗教代表が一堂に会し「世界宗教者平和会議」が開催されたこと、また、あらゆる宗教は根っこの部分ではみな同じであるという「万教同根」の考え方があることを教えて頂いたとき、私は佼成会の教えに強い感銘を受けました。私は開祖さまの教えを更に深く知りたくなり、開祖さまの様々なご著書を熱心に拝読するようになりました。

同時に大越壮年部長さんのお手取りを頂きながら、富山教会の練成会や研修会に参加し、また開祖さまの



「台北教会発足 40 周年記念式典」で説法する黒島さん

Spiritual Journey

ご生家がある新潟県十日町市の「生誕地まつり」などの諸行事にも参加させて頂いたほか、法座や手取りなど、日本での佼成会の教会活動を体験することもできました。ただ信仰の不思議なご利益だけを説く宗教に対しては拒否感を持っていた私でしたが、こうした教会活動を通じて、佼成会は開祖さまから法華経の神髄を正しく教えて頂き、日常生活に教えを当てはめて実践する学びの場であるように感じました。そして修行が進むにつれて、佼成会は教えに共感して救われた人々が、今度は自分が人さまのために役に立つ人間にならせて頂こうと願い、菩薩となって集い交流する場であることに理解が進み、佼成会の教えをととても自然に受けとめることができました。また、そうした理解が深まる中で、自分も法華経の教えを学び、開祖さま、会長先生、そして大越壮年部長さんや台北教会の簡妙芳教会長さんのように、慈悲深く聡明な人になりたいと純粋に願えるようになり、人生に新たな目標を頂戴することができました。

私は生来理屈っぽい性格でしたが、信仰体験を重ねる中で、「理屈では理解できない不可思議なことも、“現象”として現実に起きる」ことを知りました。そうした仏さまの計らいとしか言いようのないご縁を通して、私は日々あらたに佼成会との出会いを続けてまいりました。

そんな中、自分の生活を台湾に根付かせるため、会社に頼るのをやめて、自ら起業して独立しようと考えていた私は、2006年、勤めていた会社を退職し、在職中に貯めた貯金を資金にして台北市内に飲食店を開業しました。ところが、思っていた通りには行かず、残念ながら開店から数か月で閉店に追い込まれました。しかしその後、日本に本社を置くシステム開発会社の台湾支店長として仕事をするご縁を頂戴し、おかげさまで、会社の海外事業部の仕事を通して、中国や東南アジアをはじめ多くの国々を訪れ、見聞を広めることができました。そして、家内と結婚した翌年の2013年、私は飲食業にも再度挑戦し、市内に居酒屋を開業するお手配を頂戴しました。最初は家内の妹が店長を務め、その後も家内と一緒に店舗の経営を助けてくれています。おかげさまで居酒屋の売上も順調で、

スタッフも何人か抱えるまでにならせて頂きました。

そんな中、2020年に始まった世界的なコロナ禍により飲食業界は大きな影響を受け、業界全体の業績は大きく落ち込みました。台湾政府は飲食店の席数削減による感染対策を開始し、一時期は店内での飲食を禁止する措置を発表したため、私が経営する居酒屋も大きな打撃を受け、頑張って貯めた貯金は一気に底をつきました。どうやって乗り越えたのかははっきり覚えていないほど、厳しく激しい苦闘の連続でした。

身動きの取れない日々の中、大越壮年部長さんから、奥さまががんで入院されたことをお聞きました。壮年部長さんも奥さまも、これまで多くの方々の力になり、たくさんの徳を積んでこられたのだから、必ずや仏さまのご守護を頂戴して快復し、コロナ禍が終わればまた奥さまにお会いできるはずと、なかば当然のこのように考えておりました。ところが、ある日、部長さんから奥さまが亡くなられたとの悲しい報せをお聞きし、まるで拳で頭を殴られたかのような大きなショックを受け、数日間はずっと呆然として何も考えられない状態でした。「大越部長さんと奥さまは、ずっと佼成会の活動や日々の生活を通じて多くの人の力になってきたのに、何故このような思いもよらない別れが来るのか？この教



午後の交流イベントで沖縄民謡を披露する黒島さん

Spiritual Journey

えは本当に人を幸せにしてくれるのだろうか？」と、私の心には次々に疑念が湧き上がり、信仰心が大きく揺らぐ経験をしました。

やがて、2022年からコロナ禍は徐々に収束に向かい、居酒屋の経営は一時期の危機を乗り越えることができました。またシステム開発会社の業績も回復し、懸命に努力した甲斐もあって、海外に向けて大幅に販路を拡大することができました。しかし、それに伴って私の仕事はかつてないほどの激務となり、無理に無理を重ねた結果、2022年の年末に突然腹部に激痛が走り、腸閉塞と診断されて救急入院することになりました。幸い手術の必要はなかったものの、36日間、点滴を受けながら入院生活を送ることになりました。

退院後もシステム開発会社の業務量は変わらず、また中国語や英語による取引のため、日本の本社から十分なサポートを得ることもできず、引き続き激務の日々が続きました。睡眠不足で心身ともに疲労困憊しながらも、自分ではそれに気づかないまま過ごしていましたが、ある日突然、このままでは体が続かないことを実感しました。しかし、代わりに仕事を担当できるスタッフがいないため、休みたくても休めず、ましてや投げ出すわけにもいかず、精神的にも限界に達していました。

本来、私は楽天的な性格で、それまで精神的な病気とは無縁だと思っていましたが、この時はじめてうつ病を発症し、家内や家族、そして会社のスタッフにも多くの心配と迷惑をかけました。そんな中、心の安定を求めて台北教会に参拝し、簡教会長さんにご相談させて頂いたところ、教会長さんは真剣に私の心の声を聴いてくださり、症状が改善するようにと、一緒にご本仏さまに祈ってくださいました。簡教会長さんには、あらためて心より感謝申し上げます。これまでにない辛い経験ではありましたが、この経験を通じて、苦しんでいる人たちの心を少しでも理解できる自分にならせて頂けたように思います。

現在はシステム開発会社を退職し、起業した当初に立ち戻って飲食業を生活の基盤に据え、家内や家族と過ごす時間を増やし、スタッフとの信頼関係の立て直しを図る時を迎えているものと思っております。

そうした気持ちの変化を感じ始めていた昨年、「台北教会発足40周年記念式典」の打ち合わせのため、台湾を訪問されていた国際伝道部の赤川部長さんと矢島さんをはじめ、本部職員の方々が揃って私の居酒屋にお越しくくださったのです。その際に、これまでの信仰の経緯をお話しさせて頂いたところ、それがご縁となり40周年記念式典への参加と、この度の体験説法のお役を頂戴することになりました。

しばらく仏法から遠ざかっていた私ですが、体験説法のお役を通して、仏さまと、そしてご法と深いご縁を頂いていることに、あらためて気づかせて頂くことができました。今後は、無理せず、怠けず、急がず、熄まず、自分のできることで人さまのお力になれるよう、そして仏さまのご守護を頂けるよう、未熟者ではありますが精一杯精進させて頂きたいと思っております。

私は本日の40周年記念式典の中で、体験説法、教会の歴史紹介、午後の交流イベントの演出の段取りなど、様々な重要なお役を頂戴しました。仏さまからは離れられない自分であると腹を据え、非力ながらも頂戴したお役に力を尽くし、台北サンガの皆さまと手を携え、本日の記念式典を機にしっかり修行精進をさせて頂くことをお誓い申し上げます。午後のイベントも一緒に盛り上げてまいりましょう。皆さま、本日はご清聴ありがとうございました。

まんが立正佼成会入門

立正佼成会の施設

法輪閣



豆知識

「法輪」とは、人びとの苦悩や迷いを解決する仏さまの説法を、古代インドの理想の王・転輪じょうおう聖王がもつ輪型の武器にたとえたもの。また、仏さまの教えが人から人へと車輪を転がすように伝わっていく様子も表している。

世界の宗教者や各界の指導者が集まり、平和について語り合う場として、創立四十周年を迎えた1978年（昭和53年）に建てられました。

ホールには十一面千手千眼観自在菩薩像が安置されています。ロビーには、開祖さまの描いた「成道」と「初転法輪」を原画にした織物がかざられています。

また、庭園は緑豊かな草木が生い茂り、都会にいることをわすれさせてくれます。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。

<https://www.koseishop.com/>

一乗宝塔



豆知識

一乗宝塔全体の高さは約10メートル、幅約5メートルある。本体は直径2.7メートル。屋根と相輪部分はブロンズ（青銅）でできている。

開祖さまの入寂から一年後の2000年（平成12年）10月、法輪閣庭園の東側に一乗宝塔が建立されました。塔内には、開祖さまの「お舍利」とともに、愛用した法華三部経やお数珠、おたすきなどの法具が納められています。

建立には、開祖さまの教え、足跡、人徳をかみしめ、開祖さまの願いを永久に受けついでいくとの誓いがこめられています。

緑に囲まれた一乗宝塔の前にたたずみ、開祖さまの“声”にジッと耳をかたむけて、自分の心をふり返ってみましょう。



仏さまのような気持ちで
慈悲から生まれる方便
立正佼成会開祖 庭野日敬



「明るい社会づくり運動」三重大会（1982年3月）のあと、大会に参加した鼓笛隊の子どもたちと

近ごろ、会員の方々から、「一人でも多くの人に教えをお伝えしたいと努力していますが、なかなか聞いてもらえません」という、嘆きをよく耳にします。そういう悩みに対する私の答えはただ一つ、「仏さまのような気持ちで説きなさい」、これに尽きます。

お釈迦さまは法華経の「方便品」で、「若し法を聞くことあらん者は一人として成仏せずということなけん」と、キッパリと保証しておられます。ですから、そのお言葉を体して、自信をもって「法」を説けばいいのです。そして、問題はその「説き方」なのです。

お釈迦さまご自身も、悩んでいる人、苦しんでいる人の一人ひとりに対して、

ケース・バイ・ケースで現実的な指導をなさったのです。いわゆる「万億の方便」を用いられたのです。

たとえば、死んだ赤ちゃんを抱いて、「だれか、この子に薬をください！」と泣き叫んでいる母親に、「いい薬を教えてあげよう。一人も死人を出したことのない家から、ケシ粒をもらってきなさい」といわれました。その母親が町じゅうをまわってみても、死人を出したことのない家は一軒もありません。そこでハッと気がついたわけです。「死んだのは、この子だけではないのだ。お釈迦さまは、そのことを教えてくださったのだ」と。そして、正気に返ることができたのです。

このような「方便」も、心底から「その人を救ってあげたい」と思う慈悲心があってこそ生まれてくるのです。

あるとき、比丘たちが全部出はらった精舎で、腹痛で苦しむ比丘が、自分のもらした大小便にまみれて転げまわっていました。それを発見されたお釈迦さまは、その比丘を外へ連れ出され、汚れた衣を脱がせて体じゅうを拭いて、洗った衣に着替えさせてあげました。部屋もきれいに掃除し、新しい草を敷いてその上に座らせました。そのあとで、人間としての生きる道を、きわめて簡単にお説きになりました。すると、比丘は心身ともに安らかになり、その後、ついに尊敬される人になったといえます。

この事例からも、「慈悲がすべての原点である」ということを、しっかりと胸に刻んでおかなければなりません。仏さまのような慈悲心があり、慈悲の行ないがあれば、それは必ず相手に通じます。

どんな人でも仏さまと同じ性質、「仏性」を授かっています。真理を悟る素質をもっています。しかし、それはまだ卵です。卵は、あたためなければ雛に孵りません。卵をあたためる母鶏の胸が、慈悲心にほかならないのです。

庭野日敬平成法話集 1 『菩提の萌を発さしむ』P.79-81

Director's Column

平和への努力が何よりの慰霊供養

国際伝道部長
赤川恵一

皆さん、こんにちは。東京では梅雨が終盤を迎え、本格的な夏の到来が間近に迫っています。皆さんお元気でお過ごしでしょうか。

7月には盂蘭盆会の行事が行なわれ、新帰寂の御霊をはじめ、代々のご先祖さまへのご供養が、所属教会や各家庭で手向けられる慰霊の季節を迎えます。特に今年は、先の大戦終結から80年という節目の年でもあります。

わが家のご宝前には、戦争で亡くなられたご先祖さまのお戒名が一霊、お祀りされています。今年も心を込めてご供養をさせていただきながら、平和な社会の実現に向けて、自らの足もとから菩薩行を実践させていただきたいと思っております。

今月は、会長先生より「有り難い命をいただいて」と題しご法話を頂戴しました。命の尊さに思いを巡らすたびに思い出すのは、「人の生を受くるは難く、やがて死すべきものの、いま生命あるは有り難し。正法を耳にするは難く、諸仏の世に出づるも有り難し」という『法句経』の一節です。

今月と来月は、命の重みと尊さに深く思いを致す慰霊行事が行なわれます。心静かに祈りを捧げながら、会長先生がお示しくくださったように、家庭や職場などの日々の生活の場で、まず足もとから一步一步平和を築く努力をしまいたいと思います。

思いを後世に託して旅立たれたご先祖さまにとって、それが何よりの慰霊供養になることを願っております。



5月15日、ロサンゼルス教会からの団参参加者を迎えて
(大聖堂法座席、最前列中央が赤川部長)



一食を捧げる運動

Donate-a-Meal Movement



こころがよろこぶ。



「一食を捧げる運動」の日本語ウェブサイト。精神、概要、支援している団体からの情報、現地の声、ボランティア活動の様子など、さまざまな情報を掲載しております。

「一食を捧げる運動」とは

「一食を捧げる運動」とは、世界各地で起きている紛争や災害、貧困などで苦しむ人々に思いをはせ、食事や趣味に使う自分にとって必要なお金から献金し支援活動に役立てる、わかちあいの運動です。

「一食平和基金」は、1975年の運動開始以来、これまでに総額160億1,267万8,233円を世界の支援活動に拠出してきました。

今月号では、皆さんが実践してくださっている「一食を捧げる運動」浄財が、どのように世界の支援活動に活かされているかをご紹介します。

支援分野

貧困(飢餓)の解消

貧困は、人々の暮らしを脅かす大きな問題であると同時に、富や資源の不均衡な分配が争いや対立を生む原因にもなります。貧困の解消は、平和な社会を築くための大きな一歩です。そのため、人々の生活向上に寄与するこの分野における活動を支援しています。

教育・人材育成

貧困を根本的に解決するためには、一人ひとりの持つ力や可能性を引き出し、それを社会の中で発揮できることが大切です。そのために、教育の機会を届け、地域社会の中で人々が支え合い、希望を持って生きていけるような人材を育てる活動を支援しています。

保健・医療・福祉

今なお、予防可能な病気で命を失う子どもたちや、経済的な理由で治療を受けることができない人々が多くいます。誰もが健康に生きることができたための活動を支援しています。

緊急救援・復興支援

地球温暖化や環境破壊の影響で、自然災害の規模や頻度が増しています。また、紛争により避難を余儀なくされる人々も後を絶ちません。被災された方々の命と生活を守るため、緊急支援と復興への取り組みを続けています。

難民支援

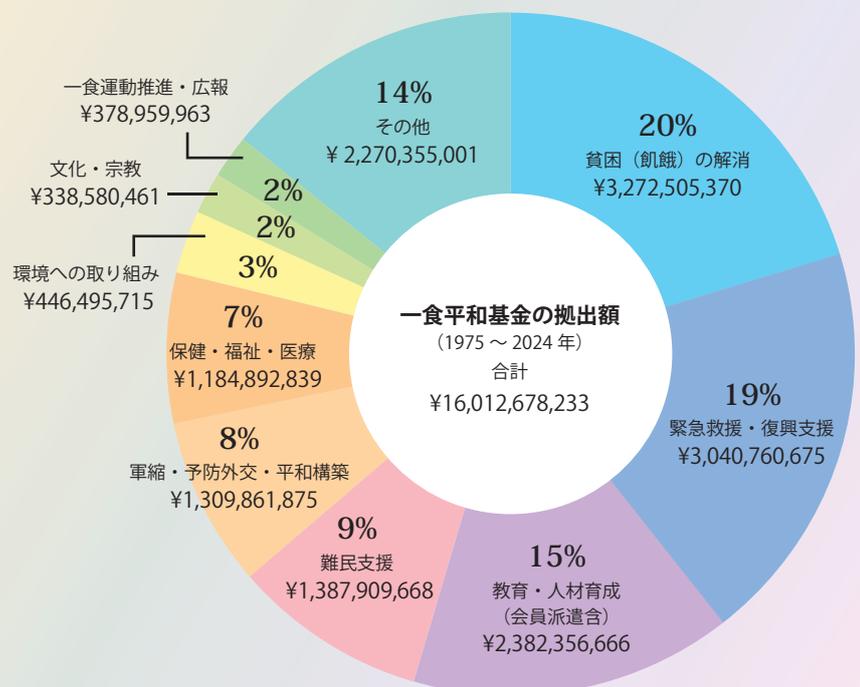
紛争や迫害により、故郷を追われた人々が年々増加しています。その命と尊厳を守り、新たな一歩を踏み出す支えとなる活動を支援します。

その他

環境保護への取り組みや、各教会による地域社会への貢献など、多様な活動を支援しています。

一食平和基金の拠出額(1975~2024年)

1USDドル = 150円





過去5年間：2020～2024年の支援事業（地域別）

ヨーロッパ地域

⑬ウクライナ

- ・人道危機 緊急支援
- ・避難民支援事業
- ・ドリーム・ギフト

アフリカ地域

⑤エチオピア

- ・軍事衝突避難民支援
- ・新型コロナウイルス緊急支援
- ・被災地の環境回復支援
- ・内戦と干ばつの影響を受けた女性と子どもたちへの緊急支援

⑥シエラレオネ

- ・妊産婦死亡削減対策支援

⑦コンゴ民主共和国

- ・新型コロナウイルス危機下における紛争被害女性のレジリエンス向上および脆弱層の感染予防支援事業
- ・紛争の影響を受けた脆弱層女性に対するレジリエンス向上プロジェクト

⑧マラウイ

- ・アフリカへ毛布をおくる運動
- ・アフリカ・HIV / エイズ事業、出生登録推進事業
- ・学校給食プロジェクト
- ・新型コロナウイルス緊急支援

⑨モザンビーク

- ・アフリカへ毛布をおくる運動
- ・新型コロナウイルス緊急支援
- ・小学校への机の設置作業
- ・サイクロン被災者への緊急支援
- ・干ばつ被災者に対する緊急支援

⑩南アフリカ

- ・南アフリカ青少年支援事業
- ・新型コロナウイルス緊急支援

⑪マダガスカル

- ・干ばつ飢饉に苦しむ住民への医療支援事業

⑫南スーダン

- ・洪水と武力衝突から逃れた避難民に対する緊急支援

中東地域

①イラク ・小児がん病棟における白血病診断の向上

②レバノン

- ・親子で取り組むゆめポッケ
- ・パレスチナ難民の学生を対象とした看護師養成事業
- ・新型コロナウイルス緊急支援
- ・ベッダウィ難民キャンプにおける学習支援事業
- ・北部における国内避難民支援
- ・空爆避難者支援

③パレスチナ自治区・ガザ地区

- ・親子で取り組むゆめポッケ
- ・空爆被害者に対する緊急支援
- ・新型コロナウイルス緊急支援
- ・子どもの栄養失調予防と改善事業
- ・ガザ人道危機緊急支援

④シリア ・情勢不安による食料危機への支援

アジア地域

⑭アフガニスタン

- ・親子で取り組むゆめポッケ
- ・人道緊急・復興支援事業
- ・洪水被害者緊急支援
- ・戦闘で親を亡くした子どもたちに対する緊急支援
- ・東部地震被災者に対する緊急支援

⑮パキスタン

- ・洪水被災者に対する緊急支援
- ・青少年地域平和活動・新型コロナウイルス緊急支援

⑯インド

- ・国内移住労働者への雇用の提供支援・ミゾラム州におけるミャンマー難民支援

⑰バングラデシュ

- ・医療サービス支援・貧困地域への学用品支援プロジェクト
- ・ロヒンギャ難民キャンプ火災

⑱スリランカ ・初等教育支援プロジェクト

- ・社会的に弱い立場にある方々への無料健康診断などの提供

⑳ミャンマー

- ・読書推進事業・学校給食プログラム・地雷犠牲者義足支援
- ・貧困・飢餓の状態に陥るミャンマーに対する緊急支援
- ・ロヒンギャ難民緊急支援事業

㉑ラオス ・農業・環境・地域開発事業

㉒カンボジア

- ・仏教研究復興支援事業・農業・環境・地域開発事業
- ・新型コロナウイルス緊急支援
- ・プレイベン県公立小学校支援プロジェクト

㉓フィリピン

- ・親子で取り組むゆめポッケ・バターン青年人材育成事業
- ・若者の自立支援プロジェクト・台風被災者マンギャン族への緊急支援
- ・台風に対する緊急支援
- ・残留日本人二世国籍回復

㉔トルコ

- ・トルコ・シリア地震被災者に対する緊急支援

㉕韓国

- ・韓国残留日本人女性への支援

㉖台湾

- ・東部沖地震被災者緊急支援

㉗日本

- ・一食地域貢献プロジェクト・人道緊急・復興支援事業
- ・国内 NGO 育成支援・国内難民支援事業・大規模災害への緊急支援
- ・一食福島復興・被災者支援事業
- ・外国人母子の保健医療サービスへのアクセス改善事業
- ・新型コロナウイルス緊急支援

南米地域

㉘ホンジュラス

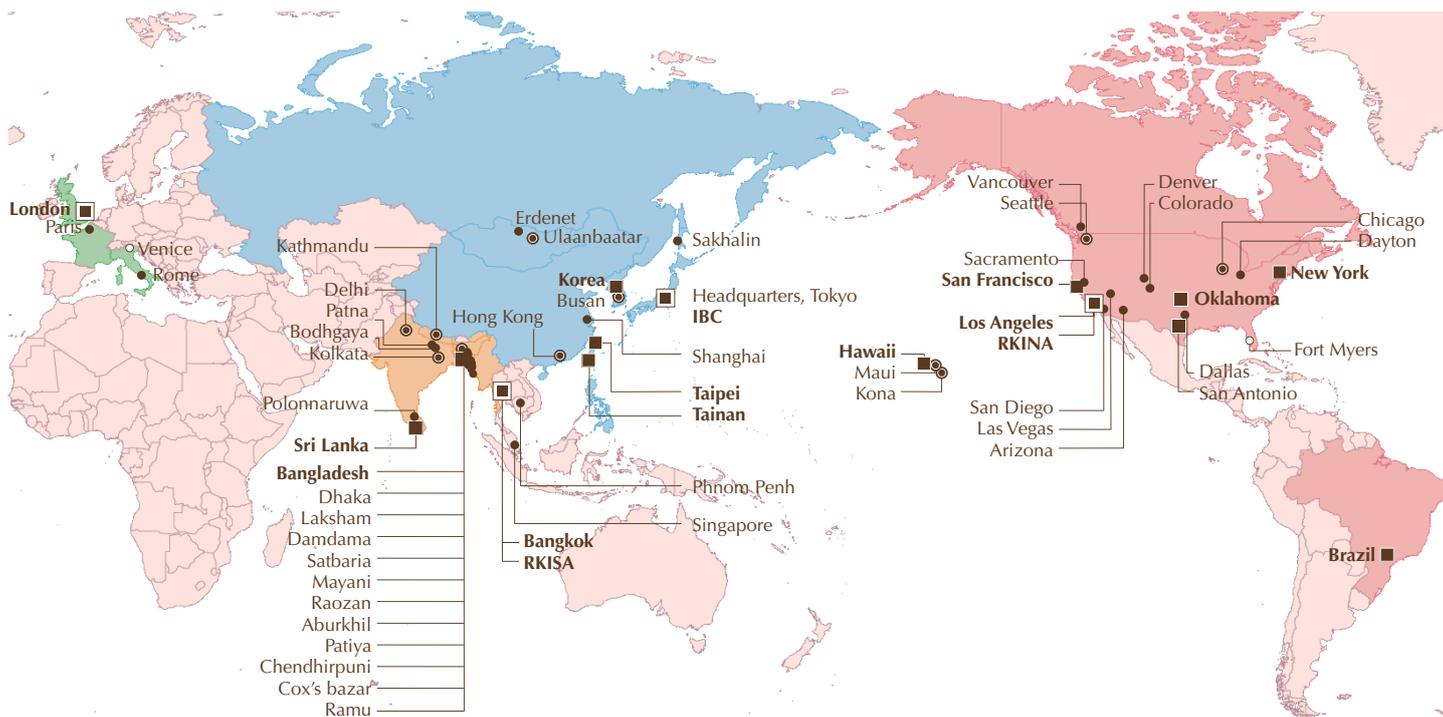
- ・家庭菜園を通じた栄養改善プログラム

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter *Living the Lotus*: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp